

ガスコンロと流し場を備えた、向かい合って六人は余裕で座れるテーブル。それが九つも設置され、壁には食器類を満載したガラス張りの棚が、いくつも並んでいる。通路での接触を避けるためか、テーブル同士の間隔には余裕があり、室内はかなり広く見える。其処は調理実習や料理教室に使われるような、設備の整った部屋だった。

そんな広い部屋にいるのは、わずか四人の少女。

そして一匹の猫だ。

茶色い毛並みの日本猫で、黄玉を思わせる大きな瞳で少女達を眺めている。場所柄、動物がいるのは衛生的に問題がある気もするが、窓際でじつとひなたぼっこをしており、動き回る様子もないので、まあ、いいのだろう。

四人の少女のうち、二人は小学生、残りの二人は高校生くらいに見える。全員、エプロンと三角巾を着用しているのだが、なぜか一人だけ黒いエプロンドレス——いわゆるメイド服に身を包んでいる。頭頂部には狐を思わせる耳が生えており、そのせいなのかは判らないが、三角巾でなく、メイドの象徴とも言えるヘッドドレスを装着している。

「——それでは、『ドキ☆ 美少女だらけの調理実習！』を始めます」

メイド服の少女が、台詞の内容とは裏腹に、平淡な口調と無表情で言った。だが、不本意な台本を仕方なく読まされているといった様子はないので、恐らく普段からこういうテンションなのだろう。実際、残る三人の少女達も、それぞれに期待の表情をメイド服の少女に向けており、テンションの低さを気にしている者はいない。

「申し遅れましたが、私は本日、皆さんのお手伝いをさせていただきます『調理実習のお姉さん』です。可愛い小学生女子達と触れ合えるこの幸せに感謝します。正直、いつまで理性を保てるか不安です」

メイド服の自称『調理実習のお姉さん』は、少しでも興奮気味に、自己紹介だかなんだか判らない挨拶を終えると、意外なほどまともに作業手順を説明した。どうやらチョコレート菓子を作るといのが、この場にいる少女達の目的らしい。

今は二月の初旬。来週は恋する乙女たちにとっては決戦とも言えるイベントがある。

二月十四日——そう、バレンタインデーである。

これは——ありえたかもしれない一幕。

『機獣少女ゾイカルやみひめ』特別企画・第二弾、始まります。

休題

『チョコレートより甘いモノ』

メイド服の自称『調理実習のお姉さん』による作業手順の説明が終わると、教わる立場なのであろう二人の少女達が動き出す。

まずは基本の手洗い。そしてテーブルに用意された材料と道具を確認する。一応、作業手順が書かれた説明書マニュアルもあるようだ。

「チョコパウンドケーキかあ。美味しそうだね」

これから作る菓子の完成予想図を思い浮かべ、少女の一人が楽しそうに言った。どちらかといえば、作るより食べるのが楽しみな様子だ。

長い黒髪をポニーテールにした、快活そうな少女である。橙色の瞳は少し吊り目がちだが、その朗らかな表情のためか、攻撃的な印象はない。

流遠るとおやみひめ。

身長・体格共に、標準的な小学六年生の女の子といった感じで、明るい雰囲気も一般的な小学生のそれである。

「ツバキはお菓子作りって得意？」

「いえ。料理はそれなりに出来ますが、お菓子作りはほとんど経験がありません」

やみひめに話を振られた少女が、少し戸惑いがちに答えた。質問の内容というより、こうして誰かと何かをする事に慣れていないのかもしれない。

ツバキと呼ばれた少女は、やみひめと同じ黒髪だが、セミロングのそれを左側でサイドポニーにしている。青く澄んだ瞳は穏やかな色を湛たえており、ツバキという少女の穏やかな性格をそのまま表しているように思える。

フルネームはツバキ・タカチホだが、地球では『高千穂ツバキ』と名乗っている。彼女は惑星ゼヘナという別の星からの来訪者なのである。

学年はやみひめより一つ下の小学五年生。身長はやみひめとほぼ同じなのだが、体格に関しては規格外な部分が一か所だけある。

それは――

「それ以上言ったら後でぶちのめしますよ？」

……地の文にツッコミを入れるな。

「どうしたの、ツバキ？ 誰に言ってるの？」

「私、何か気に障る事言っちゃったかな……？」

あらぬ方向に向かって穏やかじゃない発言をしたツバキに、残りの二人がそれぞれにアクションをする。

「あ、いえ。すみません、少し変な電波を受信してしまっただけです」

何事もなかったような澄まし顔で二人に答えると、『余計な情景描写は要りませんよ？』

といった目配せを、『此処ココにいない誰か』にした。

……そういうメタな事はやめてほしい。

「……ツバキって電波さんなの？」

「えつと……不思議ちゃんキャラを模索中なんです」

「そうなんだ。ツバキは雰囲気落ち着いてるから、ギャップがあつて良いと思うよ」

「ありがとうございます。けど、クラウドさんが落ち着いて見えます」

「私は……そう見えるだけだよ」

やみひめが『調理実習のお姉さん』に質問をしているのを横目に、ツバキと長身の少女が言葉を交わす。どことなく、ぎこちなさを感じるのは、彼女等が初対面だからだ。二人は、やみひめという共通の友人を持つ『友達の友達』という間柄なので、やみひめがいな場合、こういった微妙な雰囲気になるのは致し方ないだろう。

クラウドと呼ばれた少女は長身でスタイルも良いため、一見すると高校生くらいに見えるが、実際にはやみひめと同じ小学六年生である。

フルネームはクラウド・P・ブラン。

フランス人の血が入ったクォーターで、長い黒髪には特徴的な白いメッシュが入っている。真紅の瞳と大人びた表情からはパンクな印象を見る相手に与え、無口なため、周囲からはクールビューティだと思われるが、実際には読書好きのおとなしい性格だったりする。

「ツバキは誰かに渡すの？ チョコパウンドケーキ
間を持たせるように、クラウドが新たな話題の口火を切る。

「あ、はい。橘たちばなさんに」

「え？ でも、橘たちばなさんは……」

『橘さん』というのは、やみひめが片想いをしている少年の事だ。ちなみに、高校生である。

「私も悪いと思ったのですが、やみひめさんが『せっかくだから、一緒に渡そう』と言ってくれたので。橘さんには私もお世話になってるので、そういう意味で渡そうかと」

「そうなんだ。確かに、誰か渡す相手がいた方が楽しいと思うよ」

ツバキの話聞き、クラウドは穏やかに微笑ほほえんだ。

「……………」

「？ どうかした？」

きよとんとした様子のツバキに、クラウドが同じようにきよとんとした表情で訊たずねた。

「いえ、クラウドさんの事はやみひめさんからお聞きしていたのですが、それでも実際に話

してみても、雰囲気とのギャップに驚いてしまいました。初めは近寄りがたい印象だったので……すみません、失礼ですよね」

そう言つて、ツバキは軽く頭を下げた。

「あ、いいよ。そんな気にしなくて。慣れてるし。私も気にしてないから。えっと……ね？」
どうしていいか判らず、テンパった様子で早口に気にしていない旨を口にするクラウ。本人には悪いが、大人びた外見と、オロオロした様子のギャップは、見えていて微笑ましい気持ちになる。

ツバキも同様なのだろう。顔を上げると、その表情は優しいものに変わっていた。

身長差があるため、そのツバキの表情を見下ろすような格好になっていたクラウは、思わず息を呑んだ。

「……あのね。お願いしたい事があるんだけど、いいかな？」

「はい、なんででしょう？」

「えっと……頭を撫でてもいい？」

「え？ 構いませんけど……」

クラウの『お願い』に、ツバキは先ほどのように、きよんとした表情を浮かべた。いきなり『頭を撫でたい』と言われれば、それは自然な反応だろう。それを判っているから、クラウの態度も遠慮がちなのだろうが。

「……じゃあ」

恐る恐るといった様子で、クラウの右手がツバキの頭頂部に到達する。そのまま、貴重品を扱うように、優しく三角巾越しにクラウの掌がツバキの髪を撫でていく。

「……………」

「あの、クラウさん……？」

「……………良いな、小さくて——」

ぽつりと眩き、無心に自分の頭を撫で続けるクラウの表情が、ややトランス気味になっている事に気付き、ツバキが声をかけた——が、聞こえている様子はない。

「クラウさん？ あの、どうしたんですか……？ もう——クラウさん！」

ツバキが少し強めに声を上げたため、クラウはびくりと身を震わせた。ようやく気付いたようだ。

「あ、ごめんなさい……私、何か言ってた？」

『小さくて良いな』——と。どういう意味ですか？』

答えたツバキに怒っている様子はなく、単純にクラウの発言を疑問に思っているようだった。

「えっと、馬鹿にした訳じゃなくて……私、背が高いから、小さいのが羨ましくて。それで、良いなって言ったんだと思う……」

クラウは、自分の小学生にしては発育が良すぎる容姿をコンプレックスに感じている。だから、やみひめやツバキのような、『普通』に憧れを抱いている。それは同年代の少女達にしてみれば真逆だろう。だが、『持たない者』と同様に、『持つ者』にも悩みはある。それはある意味で、『持たない者』よりも厄介だ。少数派であるため、悩みを共感してもらいにくいから。

しかし――

「――判ります!」

がっしと手を握られ、今までの落ち着いた雰囲気から様子が一変したツバキに気圧され、クラウは少しだけのけぞった。だが、ツバキの両手に包まれた自分のそれが、何か柔らかいものに触れた事で、クラウは落ち着きを取り戻した。

柔らかなそれは――ツバキの胸だった。

服装のせいで判らなかったが、布越しでもはっきりと伝わる柔らかな感触……。

「大きい……」

「私もクラウさんと似た悩みがあるんです。だから――判ります」

「そっか……なんだか嬉しいかも」

「はい。『普通』って良いですよね」

互いに規格外な悩みを持つ少女二人の間に、仲間意識が生まれた瞬間だった。

「――ねえ、そろそろ始めよう……って、もう仲良くなったの?」

今日が初対面の友人二人が、すでに打ち解けている様子を見て、先ほどまで『調理実習のお姉さん』に質問をしていたやみひめは、喜びと共に驚いた顔をしていた。

「うん。ツバキとは上手くやっついていける気がする」

「はい。私も同感です」

やみひめは、そんな友人二人を見て嬉しそうに笑った。

「そういえば、くらは誰に渡すの?」

「え?」

「チョコパウンドケーキ」

「あ……」

今日はそのために集まったのを忘れていたのだろう。そのくらい、ツバキという理解者と出会えた事が、クラウにとっては衝撃的だったのだ。

「私は……お父さんかな」

「でも、好きな人いるって」

「そうなんですか？」

クラウの答えにやみひめが疑問を持ち、ツバキも興味を持ったようだ。年頃の少女であれば、少なからず興味がある話題だろうし、それがごく近い人間のものとなれば尚更だろう。

「でも、渡しても迷惑だろうし……」

「確かに、男性は年齢を経る毎ごとに、甘いものを食べなくなるといいますね」

「けど、アサトはすごい甘党だよ？ コーヒーに砂糖をどばどば入れているし」

「それは橘さんが、たまたま甘いものが好きなだけですよ」

「そういえば、私のお父さんも甘いものはあんまり食べないかも……」

どうやら、ツバキとやみひめは、クラウの言った『迷惑』という意味を、『甘いものを渡す事』だと思ったらしい。

「そうじゃなくて。私からもらっても、迷惑なんじゃないかって意味で……」

自分で言っていて悲しくなったのか、クラウの言葉は尻すぼみで、最後の方は声になっていなかった。

「え？ どうして？ くらうにチョコもらって、嬉しくない訳ないよ」

「無責任な意見かもしれませんが、私もそう思います。少なくとも、クラウさんにもらって、迷惑という事はないはずです」

「でも、その人は恋人っぽい人がいるし。大人の人だから、私の事なんて、女の子として見てないと思うし……」

長身を自信なげに縮ませ、俯うつむき気味にぼそぼそと口にするクラウ。その様子は、彼女の事をクールビューティだと思っている者達からすれば、想像も出来ないだろう。

だが、これが本来のクラウ・P・ブランという少女だ。

無口なのは、しゃべるのが苦手だから。

自己主張をしないのも、我がを通さないのも、自分の意見を引っ込める事で場が収まるなら、それでいいと思っているから。

自分が我慢する事で周りが幸せになれるなら、それでいい。

そうやって自分を納得させてきた。

それがクラウの処世術だ。

「だから、私は……」

渡さなくていい。

この気持ちも、伝えられなくていい。

その方が傷付かなくて済む。

「——くらは、本当にそれでいいの?」

その言葉にクラウがはっとして顔を上げると、やみひめが複雑そうな表情で自分を見ていた。

「これは私の勝手な意見だけど、気持ちを伝えるだけなら、それくらいなら、いいと思うんだ。相手がどう思ってるかは、別の問題だと思うし」

「だけど……」

「私もやみひめさんと同意見です」

少し強引に、ツバキがクラウの言葉を遮おさえった。

「確かに、クラウさんが気持ちを伝える事で、傷付く人がいるかもしれませんが、それはクラウさん自身かもしれません。ですが、それは仕方のない事です。誰にも迷惑をかけず、誰も傷付けずに生きる事なんて、人間には不可能なんです」

やみひめの意見は感情論で、ツバキの意見は真理だ。どちらも正しく、しかし絶対ではない。結局のところ、人間は自分なりの正義——正しいと思う事を決め、それに従って生きていくしかない。そういう意味では、クラウの処世術もまた正しい。

個人の決めた生き方を否定する権利は、誰にもないのだから。

「……………私、渡したい」

ぼつりと、クラウが呟くように言った。

「私の気持ち、知ってほしいから」

続く言葉は、最後までではつきりと聞き取れた。

「うん！ くらはは普段から遠慮しすぎだもん。少しくらい自分勝手でもいいと思うよ」

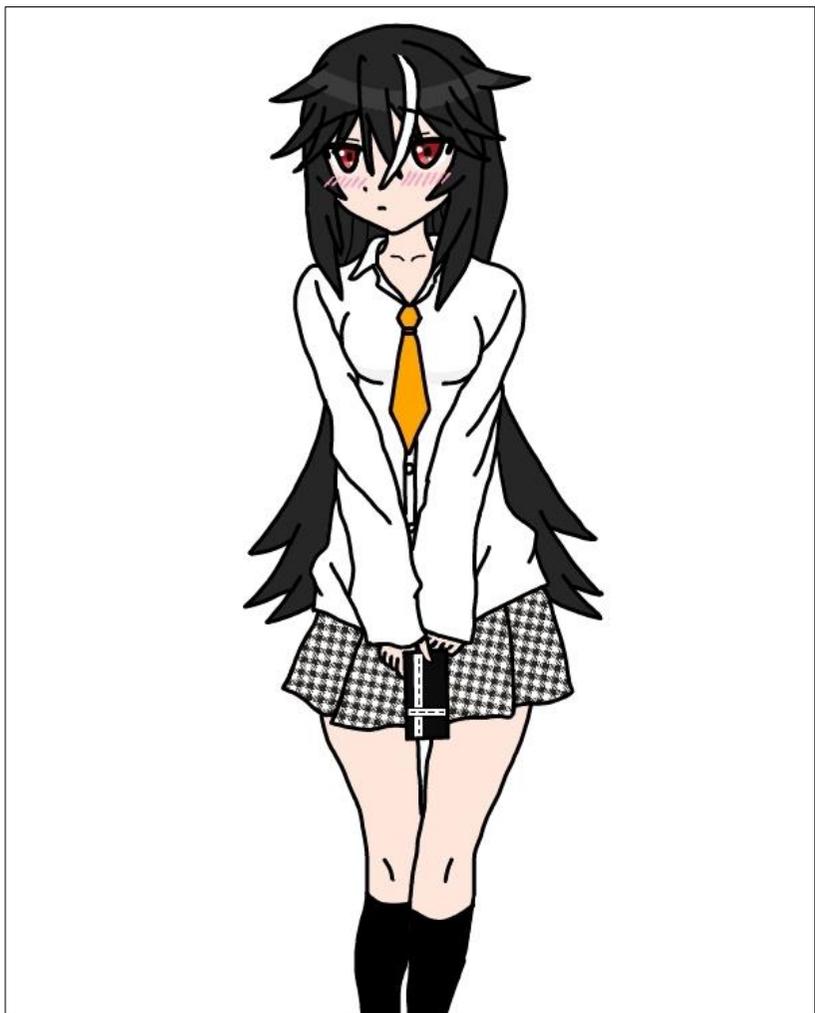
「それに、クラウさんが想いを寄せるような相手なら、大人の態度で対応してくれるはずです」

「それは……どうだろう。ちゃんとしてるし、優しいけど、朴念仁ぼくねんじんだから」

ツバキの言葉に、クラウが苦笑混じりの言葉を返すと、二人は揃そろって微妙な表情になった。

そうしていると——

——にゃー。



窓際でひなたぼっこをしていたベアトリーチェが、少女達の注目を集めるように鳴いた。
「——そろそろ調理実習を再開しますよ。恋話は終わってから、じっくりとしましょう」
少女達が鳴き声の聞こえた方を向くと、『調理実習のお姉さん』がいて、変わらぬ無表情
と平淡な口調で言った。ずっと静観していたようだが、さすがに今回の目的に戻らなけれ
ばまずいと判断したのだろう。

「お姉さんも参加する？」

「無論です。恋話はどうでもいいですが、恋話をしている皆さんには興味がありません」

やみひめのお誘いに、『調理実習のお姉さん』はやはり無表情に答えた。それでも、ほん
の少しだけ興奮気味に見えるのは、頭頂部の狐のような耳がぴくぴくと動いているせいか
もしれない。

ベアトリーチェはそれを、『やれやれだにやー』といった様子で眺めている。

やがて調理実習は再開され、慎ましくも^{かしま} 姦しい少女達の賑わいと共に、室内に甘い香
りが漂い始める。その後のチョコパウンドケーキの行方については、また別のお話。^{ゆくえ}

END

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』バレンタイン企画をお届け致します。

新サイトのプレオープンから数えると、三度目のバレンタインです。ヤミヒメ、ベアトリーチェと続き、次のイラストはどうするかと考えた結果、クラウに決めました。『ゾイヤミ』の完結が近い中、このタイミングで描かないとクラウのイラストがないまま終わってしまうからです。本編はそれどころじゃない状況ですが、この企画シリーズは本編には一切関わりのない出来事なので無問題モウマンタイです。

では、よきところで謝辞を。

まずはクラウの親御さんであり、チェックをくださった紙白さんに感謝を。ありがとうございます。自分で書いておいてなんですが——クラウ、可愛いです。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。やみ子とツバキもいいけど、クラウもね（このフレーズ、今でも伝わるんだろうか？）。引き続き、本編もよろしくお付き合いくださると嬉しいです。

チョコレートより甘いモノ——それは乙女の恋心。
なんつって。

2016/2/11 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX』小説ページに戻る